

洞院撰政家百首における家隆の改編精選の様相

岩 崎 禮 太 郎

「洞院撰政家百首」は「関白左大臣家百首」とも呼ばれる。洞院撰政とは九条道家（一一九三～一二五二）の嫡男教実（一二一〇～一二三五）のことであって、この百首は、九条家において、実質的には道家・教実父子の共権のもとに行われたものである。

この百首の計画が立てられたのは、明月記によると寛喜二年（一二三〇）六月ごろであって、当初の予定では毎月十首ずつ披講するはずであったが、結果として成立したのは貞永元年（一二三二）であり、定家の作の完成は同年四月と記され（『拾遺愚草』による）、一部の歌人が最終題「祝」を詠んだのは同年閏九月であった（『隆祐自歌合』による）と考えられる。参加歌人は二十三名であった。

この百首は一題五首、計二十題の組織であって、その二十題は、
霞 花 暮春 郭公 五月雨 早秋 月 紅葉 氷 雪 忍恋
不逢恋 後朝恋 逢不遇恋 怨恋 旅 山家 眺望 述懐 祝
であった。

ちなみに、この百首から歴代の勅撰集に入集している歌数は、新勅撰集40首、続後撰集30首、続古今集38首等、計二百首に上っている。

洞院撰政家百首における家隆の改編精選の様相

る。

家隆（一一五八～一二三七）はこの「洞院撰政家百首」のために三種の百首を作っていることが、片野達郎氏・安井久善氏によって明かにされた。両氏はその著『琴洞院撰政家百首とその研究』において、その三種の百首を載せ、その三種相互の関連について次のように述べておられる。最初に（A）「前宮内卿落葉百首」が作られた。（これは伝本の甲本系三本のいずれにも収載されている。）これは草稿的性格を有する。次に（A）とは全く別個にすべて新作を以て（B）東北大本「家隆百首」（「詠百首和歌 家隆」と記されている）が作られた。この百首の伝本五本のうち書写年代が最も古く、かつ誤字誤脱の少ない東北大本（甲本系）は（A）と（B）との両方を収録している。そうしてさらに（A）（B）二者の二百首から九十五首を厳選取捨し、新作五首を加えて新たに精選して家集『玉吟集（壬三集）』に収録したのが（C）「玉吟集百首」（「百首和歌 洞院撰政家」と記されている）ということになる。（A）と（B）とは重複する歌が全くなく、（A）と（C）とに重複する歌が二十一首、（B）と（C）とに重複する歌が七十四首である。

以上が片野氏・安井氏の研究の結果明らかになったことである。

更に、片野氏・安井氏の論考によると、次のことが述べられている。定家の「明月記」の寛喜二年六月九日の条を見ると、七十三歳の家隆はこの時「老者恩免」となっていたことがわかる。その後、遅れて参加作者に加えられた家隆が、この百首のための詠作、すなわち「落素百首」の詠作を完成したのは、翌寛喜三年である。ところで、この「落素百首」の中の五十八首が「玉吟集百首」以外に、玉吟集の中に散在している部類歌の詠出年次不詳歌（例外として一首だけは承久二年の八大僧正四季百首⁴に見出される）に見出される。これは、家隆の既存の詠歌から「落素百首」のためにかかなりの数の歌が利用されたとみる方が自然な考え方であろう。すなわち、家隆のこの百首への参加は他の歌人より遅れて決定したため、倉卒の間に百首をまとめる事情に迫られ、新作に加えて、百首の歌題に合う旧作でかなりの数を補ない「落素百首」を編んだのではなからうか。そうして、この「洞院撰政家百首」の披露が計画時の予定から二年ほど延期されたために、「家隆百首」として改編補訂されたであろう。次に、二十三名の歌人の参加による「洞院撰政家百首」が貞永元年（一一三二）に成立した後、さらに想を改め精選の度を高めて、自ら納得のいく形とした私家版の決定稿が「玉吟集百首」であろう。以上が片野氏・安井氏の論である。

本稿においては、両氏に導かれ、両氏の作成された校本により、この三つの百首の間における改編補訂の様相を細かく見てゆきたい。

〔第一表〕

(計)	紫式部集	伊勢物語	後拾遺集	拾遺集	後撰集	古今集	万葉集	
33	2	2	2	2	2	9	16	A
53	1	2	1	1	2	14	32	B
52	1	2	1	3	3	15	27	C

になる。

〔第二表〕

家隆	定家	
2	2	六百番歌 合百首 (一一九三)
4	7	千五百番 歌合百首 (一一〇一)
21	15	内大臣家 百首 (一一一五)
9	11	内裏名所 百首 (一一一五)
14	13	後鳥羽院 百首 (一一二六)
A 16 B 32 C 27	5	洞院撰政 家百首 (一一三二)

(A) (B) (C)の三種類の百首における各々の歌がふまえた古歌（本歌・参考歌）の数について、筆者が調査したものを、出典別に集計すると、第一表のようになる。第一表に示したように、この百首の家隆の歌には万葉集の歌をふまえた歌が多い。

このことに関連して、少し前の年代からの百首における、万葉集の歌をふまえた歌の数を、定家と家隆とについて調査すると、第二表のよう

このように、建保年間の内大臣家百首から、万葉集の歌をふまえた歌が多くなっている。

そこで、(A) (B) (C) の間における、万葉集の歌をふまえた歌の推移をまず考察したい。

三

この時期において、家隆の万葉集に対する関心は極めて強いのであるが、万葉集の歌をふまえた歌でありさえすれば、どのような歌でもこの百首の決定編(C)にただちに採り入れたというわけではないことが知られるのである。この百首の決定編である(C)においては、(A)における万葉集をふまえた歌十六首のうち十三首という多数の歌を捨て去り、三首だけを採用している。

捨て去られた十三首は次のとおりである。(万葉集の歌は日本古典文学大系によった。)

(1) さは姫の山桜戸の朝といでの袖にみだるる花のしら雪(花)

(参考歌) 万・二六一七「足ひきの山桜戸をあけおきてわが待つ君を誰かとどむる」

(注) 「山桜戸」という語の用例は、万葉集ではこの一例のみ。国歌大観の索引によると以後は新勅撰集の定家の歌まで用例がない。「羽戸出」の語は、万葉集に四例あり、以後は六百番歌合の願昭の歌まで用例がない。

(2) 春の日もいまいくかかはあすか河ななせのよどにしがらみもがな

(本歌) 万・一三六六「あすか河七瀬の淀にすむ鳥も心あれこそ波立てざらめ」

(8) はるををしみあまのかぐ山袖ぬれぬあすはう月の衣はすとも

洞院撰政家百首における家隆の改編精選の様相

(本歌) 万・二八「春過ぎて夏きたるらし白たへの衣はしたり天の香具山」

(4) かざしをる人もかよはずなりにけり三木の檜原の五月雨の空

(本歌) 万・一一八「いにしへにありけむ人もわが如か三輪の檜原に挿頭折りけむ」

(5) 長月のしぐれふるらしならの山このてかしばも色付にけり

(本歌) 万・三八三六「奈良山のこのてがしほの両面にかにもかくにもねちけひとの徒」

(6) わがこひはしかのあま人やくしほのひとひもおちずたつ煙かな

(本歌) 万・三六五二「志賀の海人の一日もおちず焼く塩のからき恋をも吾はするかも」

(7) 我かけしぬさやかへさむちはやふる神にいのりし君にあはずは

(本歌) 万・五五八「ちはやふる神の社にわが掛けし幣は賜らむ妹に逢はななくに」

(8) たちかへりゆきもやられずあさかしはぬるやかはべのしののめの道(後朝恋)

(本歌) 万・二七五四「朝かしはうるは川べの小竹の芽のしのひてぬれば夢に見えけり」

(9)ちぎりしに月はかはらぬながきよをひさにおきゐてねをのみぞなく(逢不遇恋)

(本歌)万・三三三「月日は行きかはれども久に経るみもろの山の離宮地」

(10)たよりあらばいもにつげこそさをすきてならの手向にぬさはおきつと(旅)

(本歌)万・三〇〇「佐保過ぎてならの手向に置くぬきは妹を目離れず相見しめとそ」

(11)あざごろもまだをりなれぬおく山のしきみが花の露にぬれつと

(山家)

(本歌)万・四四七六「奥山のしきみが花の名のごとやしくしく君に恋ひわたりなむ」

(12)みかさ山さしさかえゆく榊葉に木綿とりしていのる神人(祝)

(参考歌)万・一〇三一「おくれにし人をしのはくしでの崎木綿とり垂でてさきくとそ思ふ」

(注)「木綿とりして」の語は万葉に二例あるのみで、他に用例なし。

(13)君がよはためしもあらじ天地を照らす月日のきはめなければ

(祝)

(本歌)万・四四八六「天地をてらす日月のきはみなくあるべきものをなにかおもはむ」

右の十三首が捨てられてしまつて、(C)の百首に採られなかつた理由を考えよう。(1)の歌は平板である。(2)(3)は万葉から取つた語句が必ずしも惜春の情と緊密に結びついているわけではない。(4)(5)

は歌として平板である。(6)(7)は本歌の詞を多く取り過ぎてゐる。すなわち、定家の「詠歌大概」における「取古歌詠新詠二事、五句之中及三句者頻過分無珍気、二句之上三四字免之」という制限を越えていることが主な理由であろう。(8)(9)は恋の歌として平板である。(10)も本歌の詞の取り過ぎである。(11)(12)は平板である。(13)は新古今集賀巻の、

君が代は千世ともささじ天の戸や出づる月日のかぎりなければ(七三八、俊成)

によく似ているので避けたのではあるまいか。

次に、(A)における万葉歌からの本歌取の歌であつて、(C)の百首に採られた三首は次のとおりである。

(14)あかねさす日も夕潮にこぐ舟のわたりの山も紅葉しにけり

(紅葉)

(本歌)万・一三五「……大舟の渡の山のみち葉の散りのがひに……」

(15)まきもくのゆつきが嶽に雲さえてあなし河浪あさ水せり(水)

(本歌)万・一〇八七「あなし河河浪立ちぬ巻目のゆつきがたけに雲居立てるらし」

(16)山もとはまだ色づかね浪間より一葉こがるるあけのそほ舟

(本歌)万・二七〇「客にして物恋しきに山下のあけのそほ船おきへこぐ見ゆ」

右の(14)の歌は、「わたりの山」(石見國の山)にかかる序詞がお

もしろく、その「あかねさす」が下句の「紅葉」と響き合つて効果的であつて、おおらかな歌になつてゐる。(19)の歌は、万葉の本歌を冬の季節に変えた歌として巧みに詠まれており、長高い歌になつてゐる。(19)の歌の第二句、第三句は「Cの百首」においては「おなじみどりの波ぢより」と改作されてゐる。そのようになれば、下句として「一葉こがるるあけのそほ船」と続けたところに詞続きのおもしろさと色の対照の鮮やかさが出て、一首全体で広大な眺望とその美しさがよく表わされた歌になつてゐる。

四

次に、(B)の百首における、万葉歌をふまえた歌三十二首のうち、九首を捨て去り、二十三首を(C)の百首に採つてゐる。

捨てられた九首は次のとおりである。
 (1)なはの海おしける宮に聞えけむ花のさかりはいまもかはらず

(花)

(本歌) 万・四三六一「桜花いまさかりなり難波の海押し照る宮にきこしめすなへ」

(2)みなつきのすがのあらのの郭公まだ萩さかずまたかへりなけ

(郭公)

(本歌) 万・三三三二「信濃なる須賀の荒野にほととぎす鳴く声きけば時すぎにけり」

(3)風たちてしぐれは浪もたかききのうらまの紅葉えやは折りこむ

(紅葉)

(本歌) 万・三七〇二「竹敷の浦廻の黄葉われ行きて帰る来る

洞院撰政家百首における家隆の改編精選の様相

まで散りこすなゆめ」

(20)あなし河みぎはや遠く氷るらむ中ゆく浪のおとぞすくなき(水)

(本歌) 万・一〇八七「あなし河河浪立ちぬまきもくのゆつぎがたけに雲居立てるらし」

(21)さゆる夜のけさいかばかりいかるがのよるかのいけは氷しぬらむ(水)

(参考歌) 万・三〇二〇「いかるがの因可の池の宜しくも君を言はねば思ひそわがする」

(注)「よるかの池」の用例は万葉のこの一例のみで、他にはない。

(22)影さえていくへかこほるます鏡みなぶち山の谷川の水(氷)

(参考歌) 万・一七〇九「御食向ふ南淵山のいはほには落りしはだれか消え残りたる」

(注)「みなぶち山」の用例は万葉に二例あるのみで、他にはない。

(23)人ごころおもひいづるも出雲なるさだの浦波さだめかねつつ(逢不遇恋)

(本歌) 万・三〇二九「左太の浦に寄する白波間なく思ふをなにか妹に逢ひがたき」

(24)みわたせば夕日ぞ残る住吉の岸にむかへるあはぢしま山(眺望)

(本歌) 万・三一九七「住吉の岸に向かへる淡路島あはれと君を言はぬ日はなし」

(25)たまくせのみそぎが原にすむ千鳥君をや千代となほ祈らむ(祝)

(本歌) 万・二四〇三「玉久世の清き河原にみそぎして齋ふ命は妹がためこそ」

右の(17)(20)(21)の各の歌は、万葉集の歌の詞を取って用いたというだけであつて、歌としては平板である。(18)の歌は、信濃国の須賀に荒野における郭公という珍しい素材を詠んだものと考えられるけれども、郭公は本来五月のものであり、「枕草子」の「鳥は」の段に郭公について「六月になりぬれば、音もせずなりぬる」と書かれていて、六月のほととぎすを詠むことは空疎な感がある。(19)の歌を見ると、その本歌は天平八年(七三六)に新羅に派遣された使節の中の一人が往路に對馬の竹敷の浦で詠んだ歌である。ところが、(19)の歌がはるかに遠い對馬の竹敷の紅葉を折ってくることで、さきであらうかと詠んでいるのは、この百首の歌としては実感を伴わない。

(20)の歌は、かの、

さよふくるままにみぎはやこほるらんとほざかりゆくしがの浦波

(後拾遺・冬・快覚)

に甚だ類似している。以上のように、右の九首はそれぞれ家隆の意に満たないものであつたがために、(C)の百首に採られなかつたと考えられる。

(B)の百首における万葉歌をふまえた三十二首のうち、(C)の百首に採つた歌は次の二十三首である。

(21)つくばねの新桑まゆのきぬよりも霞の衣春いそぐらし(霞)

(本歌)万・三三五〇「筑波嶺の新桑繭の衣はあれど君が御衣

しあやに着欲しも」

(22)春きぬと雪まのわかなしづのめがつむがの野べぞ朝霞みゆく

(参考歌)万・三四三八「都武賀野に鈴が音聞ゆ上志太の殿の仲子し鷹狩すらしも」

(注)「つむが野」の用例は、国歌大観の索引によると、右の万葉の一用しかない。

(23)あさがすみかひやのけぶりたちそめてまだはるふかきしづのをやまだ(霞)

(本歌)万・三八一八「朝霞鹿火屋が下の鳴くかはづしのひつつありと告げむ兒もがも」

(24)のとの海のとどかにかすむ春の日は沖に出て添ふあまの釣舟

(霞)

(本歌)万・三一六九「能登の海に釣する海人の漁火の光にいわけ月待ちがてり」

(25)ひきとめよ紀の関守が手束弓春の別れもたちやとまると(暮春)

(本歌)万・五四五「わが背子が跡ふみ求め追ひ行かば紀の関守い留めてむかも」

(参考歌)今鏡(古歌)「あさもよひ紀の関守がたつか弓ゆるす時なくあが思へる君」

万・四二五七「手束弓手に取り持ちて朝かりに君は立たしぬ榎倉の野に」

(注)「紀の関守」「手束弓」の用例は、国歌大観の索引によると、右の万葉の各一例と今鏡の一例しかない。

(26)さみだれば渡りを速み泉川こま山見えす雲ぞかかれる(五月雨)

(本歌)万・一〇五八「こま山に鳴くほととぎす泉川渡を速み

ここに通はず」

⑧思ふ人まつ里あらばさみだれのなみくら山もよはに越えなむ

(五月雨)

(本歌) 万・一一七〇「ささなみの連庫山なみくらやまに雲るれば雨そ降るちふ帰り来わが背せ」

⑨つくばねの山鳥の尾のます鏡かけて出でたる秋の月影(月) (続古今・秋上・三三八に採られている)

(本歌) 万・三四六八「山鳥の尾ろの初麻はつをに鏡かけ唱ふふみこそ汝に寄そりけめ」

(参考歌) 千載・二八六「山の端にますみの鏡かけたりとみゆるは月の出づるなりけり」

⑩あしの葉に夕霧立ちぬ難波むか武庫むくの山べも色づきぬらむ(紅葉)

(本歌) 万・三五七〇「あしの葉に夕霧立ちて鳴が音ねの寒き夕し汝ゆみをは偲おもはむ」

⑪をとめこが紅葉の衣うちしぐれ袖ふる山の秋のみづかき(紅葉)

(本歌) 万・五〇一「未通をとめ女をとめらが袖振ふる山の瑞垣みずかきの久しき時ゆ思ひきわれは」

⑫もみぢ葉もまた色見えて流れゆくやそ宇治川の秋の夕暮(紅葉)

(参考歌) 万・二六四「ものふの八十やそうちかは氏河あじろきの網代木あじろきにいさよふ波の行くへ知らずも」

(注) 「やそうちかは」の語は、国歌大観の索引によると、万葉集に三例あり、以後は千載集の俊頼の歌に至るまで用例がない。

(怨恋)

洞院撰政家百首における家隆の改編精選の様相

(本歌) 万・四四五七「住吉すみのえの浜松しんじが根ねの下延しんじへてわが見る小野の草くさな刈りそね」

⑬思ひ川おもひがわみなわさかまき行く水の袖ゆかたのつつみもせきやかかねてむ

(怨恋)

(本歌) 万・二四三〇「宇治川うぢがわの水みづ泡うぶさかまき行く水の事ことかへらずそ思おもひ始めてし」

⑭逢ふことは君きみにぞかたき手たぢけ向むかしていはくに山は七日ななひこゆとも

(不逢恋)

(本歌) 万・五六七「周防すはにある磐国山いはくにやまを越えむ日は手て向むかよくせよ荒しその道」

⑮鳴く鳥の声こゑもうらめし恋衣こひころもききなれの山やまのかへるさの道みち(後朝恋)

(本歌) 万・三〇八八「恋衣こひころもき着き奈良ならの山やまに鳴く鳥とりの間ま無く時とき無しわが恋こゝろふらくは」

⑯夕暮ゆふぐはなはたのむかなわすられていくひきさにもならぬ別わかれは

(遇不逢恋)

(本歌) 万・二五八三「相見あひまてはいく久ひさきにもあらずに年月としづきのごと思おもほゆるかも」

⑰玉たまほこの道みち行き人ひとに夕ゆふけとふことの葉はをさへ恨うらみてぞくる

(怨恋)

(本歌) 万・三九七八「妹あなもわれも心こゝろはおなじ……玉たまほこの路みちはし遠とほく……門かどに立ち夕ゆふ占うら問ひつつつ吾あを待まちつと寝なすらむ妹あなを逢あひて早見はやみむ」

(注)「ゆふけ問ふ(の)」の用例は、万葉集五例、拾遺集二例、古今和歌六帖一例、清原公集一例があり、拾遺集の二例は人麿の歌である。

(43) つげやらばいもやとがむむにゐた山岩根の枕誰にかはすと(旅)
(参考歌) 万・三四〇八「新田山嶺には着かなな吾に寄そり問なる児らしあやに愛しも」

(注)「新田山」の用例は右の万葉の一例のみで、他にはない。

(44) たつた山夕こえくれぬ大伴のみつのとまりに舟や待つらむ(旅)
(新拾遺・羅旅に採られている)

(本歌) 万・三七二二「大伴の御津の泊に船泊てて龍田の山をいつか越え行かむ」

(45) いもにこひよる白玉のうら風に衣かたしきあけぬこの夜は(旅)
(本歌) 万・一六九二「わが恋ふる妹は逢はさず玉の浦に衣片敷きひとりかも寝む」

(46) あまつ空雲のはたてにとぶ鳥のあすかの里をおきや別れむ

(眺望)

(本歌) 万・七八「飛ぶ鳥のあすかの里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ」

(47) やほよろづ久に見るべき豊国の鏡の山も我が君のため(祝)
(本歌) 万・三二一「あづさ弓引き豊国の鏡山見ず久ならば恋しけむかも」

(注)「豊国の鏡山」の用例は、国歌大観索引によると、万葉集に三例、古今和歌六帖に一例(万葉集にある人麿の歌と同じ)あり、その後は続古今集の知家の歌まで用例がない。

(48) 朝寝がみ人の手枕おき別れ乱れてのちぞものは悲しき(後朝恋)

(続古今・恋三所収)

(本歌) 万・二五七八「朝寝髪われはげづらじ愛しき君が手枕触れてしものを」

以上の(B)の二十三首は、(A)(B)の二百首の中から厳選した九十五首の中に入った歌である。(46)の歌は、万葉語を巧みに用いて「霞の衣」を導き出して、おおらかに詠んでいる。(47)の歌は、「つむ」を掛詞としたおもしろさがあり、朝霞の景をおおらかに詠んでいる。(48)の歌は、万葉の相聞の歌の序詞の中にある「朝霞鹿火屋」を取って実景に用い、「春深きしづの小山田」に朝霞がかかり、鹿火屋の煙が立ちそめるという、超俗的な静寂感のある歌にしている。(49)(50)の歌は、長高い叙景歌になっている。(51)の歌は、万葉語を巧みに用いて、強い積極的意欲を表わした歌である。(52)は、眼前の自然現象からおおらかな想像をしている長高い歌である。(53)は、万葉の相聞歌の序詞の中の語を実際の景物に用いて、おおらかに詠んでいる。(54)は、本歌の人麿の歌を連想させる八十氏河に、秋の夕暮紅葉葉が流れてゆくという情景を詠んでいて、興味がある。(49)は、本歌における上句の比喩は「わが見る」にかかり、それは更に「小野の草」にかかっているのであるが、その比喩を「恋ひぬ日はなし」にかけて「恋ひぬ日はなし」にかけて恋の歌としたおもしろさがある。(50)は、万葉の「宇治川」を「思ひ川」に変え、「袖のつつみ」と組み合わせて「忍恋」の歌にした巧みさがある。(51)は、遠い旅をする人に対して道中の無事を祈る本歌から詞を取って、道中の危険な山は越え得たとしても恋の相手に逢うことのむずかしいということを嘆く歌としていて、巧みである。

(40)は、本歌では、「恋衣着」が序詞として、着馴らすの意味で同

音の「奈良(の山)」にかかっている、奈良の山に鳴く鳥の声が絶えないようにいつもわたくしは恋ひ慕っている」と詠んでいるのを、家隆の歌では、後朝の帰途における「恋衣きなれの山」の鳥の声もうらめしいと、後朝の歌に変えてしまっているところがおもしろい。(41)は、会わないでいた期間を長く感ずるという一般的な気持を詠んだ万葉歌から「いくひささにも」という詞を取って、「夕暮はなほたのむかな」という、遇不逢恋のせつない心を表わす歌に変えているところが巧みである。(42)は、万葉歌から「夕占問ふ」を取り、その「この葉をさえ恨」むとして怨恋の歌としたところが巧みである。(43)は、万葉の東歌における民謡的発想を旅の歌に変え、本歌における恋の情を「告げやらば妹やとがめむ」という発想にしたところがおもしろい。(44)は、本歌は新羅に遣わされた使節団の一人が、乗っている船が難波近くなつて、心は京へと急いで龍田山を越える時が待ち遠しくもどかしくなるという気持を詠んでいるのであるが、この歌ではその反対の方向の旅の心を詠んだ歌にしている、おらかな歌になっている。(45)は、本歌が「ひとりかも寝む」となっているのを、「あけぬこの夜は」と朝詠んだ歌に変えている。更に、「よる白玉のうら風」という表現によって、「よる白(玉)」が序詞ではあるが、真珠が寄ってくるイメージを表わして美しい。(46)は、本歌では「飛ぶ鳥の」が枕詞になっているのを、この歌では「あまっ空雲のはたてにとぶ鳥の」と実景にして、長高い眺望の歌にしているところによさが認められる。(47)は、万葉歌から詞を取って、本歌における鏡の山に対する愛着を詠んだ歌を、「我が君」に対する祝の歌にしたところがおもしろい。(48)は、万葉における、相

洞院撰政家百首における家隆の改編精選の様相

手に対する愛着の心をこめた「朝寝髪われはげづらじ」を変えて、「朝寝髪」の「乱れてのち」を導き出し、「ものは悲しき」という後朝の悲哀の情のこもった歌にしている、巧みである。

以上のように、(C)に採られた、万葉歌をふまえ歌は、よく工夫が加えられていて、大部分は万葉風な素朴雄勁な歌、おらかな歌になっており、それぞれ実感のこもったものになっている。

五

最終的に成立した(C)の百首においては、(A)の百首から二十一首を採り、(B)の百首から七十四首を採り、これに新作五首を加えて、新たに編まれている。そのときの新作五首は次のとおりである。

たむくとも春はとまらじゆふたたみたなかみ山のかひやなからん

(暮春)

(参考歌) 万葉・三〇七〇「木綿屋田上山のさなかづらあり

さりてしも今ならずとも」

(注)「ゆふたたみたなかみ山」の用例は、国歌大鑑索引によると右の万葉の一例のみ。

あふひ草けふもよそにてゆふたすきかけぬ日もなくなほ恋ひよとや(不逢恋)

(本歌) 古今・恋一・四八七「ちはやぶる加茂のやしらの木綿だすきひと日も君をかけぬ日はなし」

かはらじのかたみといひし月影もあまりて空に人ぞ恋しき

(遇不逢恋)

(本歌) 後撰・恋一・五七八「あさじふのをのしのはらしのぶ

れどあまりてなどかひとのこひしき」

なさけとて身にかへざりしあふことはわすれぬ程の命なりけり

(遇不逢恋)

〔歌〕拾遺・恋一・六八四「いきたれば恋することのくるしきになほいのちをばあふにかへてん」

〔本歌〕古今・春下・九七「春ごとに花のさかりはありなめどあひみむことは命なりけり」

春秋の宮さへかけて雲の上をあまてる神や八千代まもらん(祝)以上のように、(C)の百首における新作五首は、万葉・古今・後撰・拾遺の歌をふまえた歌各一首、その他一首となっている。そうして、いずれも言葉続きに工夫がこらされ、表現に張りのある歌となっている。

六

この洞院撰政家百首の定家と定隆との歌において、古歌をふまえた歌について、そのふまえた古歌の数を出典別に集計(家隆の歌については最終決定編である玉吟集百首による)すると、第三表のようになる。

〔第三表〕

家隆	定家	万葉	古今	後撰	拾遺	後拾遺	伊勢物語	源氏物語	その他	計
27	5									
15	17									
3	2									
3	5									
1	1									
2	3									
0	1									
1 (紫式部集)	1 (新古今・二八三) (壬生忠岑の歌)									
52	35									

前掲の第二表によって、兩人の万葉歌をふまえた歌の年次による推移を比較すると、定家においてはこの百首に至ると激減しているのに、家隆においては逆に増加している。

ところで、この百首における定家の万葉からの本歌取の歌を見るに、さみだれの日かすも雲もかさなれば見らく少きよもの山のは

(五月雨)

〔本歌〕万・一三九四「潮満てば入りぬる磯の草なれや見らく少く恋ふらくの多き」

三輪の山さつき空のひまなきに檜原の声ぞ雨を添ふなる

(五月雨)

〔本歌〕万・一一一八「古にありけむ人もわがごとか三輪のひはらにかざし折りけむ」

こほりゐておきなが河の絶えしよりかよひしにほの跡を見ぬかな

(水)

〔本歌〕万・四四五八「にほ鳥の息長川は絶えぬとも君に語らむ言尽きめやも」

道のべの人ごとしげき思ひ草霜のふり葉と朽ちぞ果てぬる

(怨恋)

〔本歌〕万・五四一「現世には人言繁し来む生にも逢はむわが背子今ならずとも」

久にふる三室の山のさかき葉を月日は行けど色もかはらぬ(祝)

(本歌) 万・三三三二「月日は行きかはれども久にふるみもろの山の離宮地」
つひは ちみやとこ

であって、できあがった歌は、「久にふる」の歌を除いては、知的構成による言葉続きの巧緻さが見られたり、感情の繊細さが見られたりして、万葉調とは言えないと考えられる。

これに反して、この百首における家隆の決定編(C)における万葉歌をふまえた歌は、さきに「五」「七」「八」において挙げたように、大部分がおおらかな歌、素朴雄勁な歌、すなわち長高い歌という特色をそなえ、万葉調の歌になっている。

七

家隆は定家と並び称せられ、新古今集には四十三首撰入されていて、巧緻な表現力を持った歌人である。彼には余情妖艶というべき歌もあるが、そういう歌では定家に比して劣っていて、むしろ清澄な趣という点にその歌の独自の特色があると見られる。

ところで、「後鳥羽院御口伝」において、家隆の歌は「たげもあり、心も珍らしく見ゆ。」と評されている。前掲の第二表によつて明らかのように、家隆は建保以来、万葉集の歌をふまえた歌を多く詠み、「内裏名所百首」(建保三年・一二一五)においても、万葉集の歌を本歌とした歌として、

あまの原空飛ぶ鳥の飛鳥河かへらぬ波やふるさとのあと

(飛鳥河・雑)

(本歌) 万・七八「とぶ鳥の飛鳥の里をおきて去なば君があたりは見えずかもあらむ」

洞院撰政家百首における家隆の改編精選の様相

月かげのさすかいほざきすみだ河越えてまつちの山のかひより
すみにだ (角太河・雑)

(本歌) 万・二九八「まつち山夕越え行きていほさきの角太河原にひとりかも宿む」

のように長高い歌を詠んだのであった。

その後も万葉歌に強い関心を持ち続けた家隆は、この「洞院撰政家百首」において、万葉歌をふまえて万葉調の素朴雄勁な歌、おおらかな調べの歌をちりばめるなどして、百首全体を盛り上げようと考えたのであろう。しかし、この百首において、ただ一回だけの詠歌では、必ずしも満足するものができ上らなかったであろう。そこで、次々と改作を試みて、自己の歌を練り上げては改編精選していった。その過程において三種類の百首の形となって現れ、遂に最後の決定編(C)となったのであろう。

八

家隆のこの百首における佳作は、万葉歌をふまえた佳作だけではない。「五」において挙げた歌のほかに、

老いぬればさらぬ別れも身に添ひぬいつまでか見む秋の夜の月

(月) (B、C) (続後撰・雑上所収)

(本歌) 古今・九〇〇「老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君かな」

人めのみしのぶが原にゆふしめの心のうちに朽ちや果てなむ(忍恋) (B、C) (続古今・恋三所収)

(本歌) 後拾遺・四〇五「紅葉ゆゑ心のうちにしめゆひし山の高

嶺に雪ふりにけり」

も佳作と言えるであろう。また、

吉野川桜かざして行く波のうつろふ花に春風ぞ吹く(花) (B、C)

三島江のにはの浮巢も乱れあしの末葉にかかる五月雨のころ(五月雨) (A、C) (注、Aでは初句「難波江の」)

のように、絵面的情趣を展開する歌であって気分³に重心をおいた写景歌(小島吉雄氏が気分的もしくは構想的写景歌と名づけておられる)の佳作もあり、

はるばると霞みくれぬる山のはにおぼる月夜の影ぞいさよふ

(霞) (B、C)

さゆる日の雲まの日影おのづからうつるもしらずこほる池かな

(水) (A、C)

のように、叙景的要素もあるが鮮明な絵画的情趣を展開しているとは言いがたく、むしろ気分情調を漂わせることを主眼としている歌の佳作もある。

このように、万葉歌をふまえた歌の佳作のほかに、他の古歌の本歌取の歌や、本歌取以外の歌においても気分情調を漂わせた歌の佳作もあり、多様な佳作によって盛り上った百首の決定編を生み出している。

この百首において、家隆は高齢にもかかわらず、自らの歌を練り上げては改編して三種の百首を残し、最後の決定編にまで精選するに至った精進の跡を示していることがうかがわれるのである。

[注]

1 (1) 片野達郎氏・安井久善氏著「松本洞院撰政治家百首とその研究」

(2) 久保田淳氏編著「藤原家隆集とその研究」

2 日本古典文学大系「平安鎌倉私家集」五八一ページにおける久保田淳氏による補注

3 注1(1)

4 注1(1)の書、二三〇～二三二ページ

5 久松潜一氏は、中古から中世への転換期において、現実生

活から脱却または逃避しようとする思潮の一つに復古精神があり、古代の淳朴や真实性を求める精神が万葉集に復る精神となつて現れたと述べておられる。(東大新書「国文学」一八三、一八四ページ)

6 (1) 久松潜一氏による「藤原家隆集とその研究」(久保田淳氏編著)の序文

(2) 安田章生氏「新古今集歌人論」一八四ページ

7 この百首の家隆の歌(玉吟集百首)から勅撰集に撰入された歌は、続古今1・続古今4・玉葉1・新拾遺1・新後拾遺1である。

8 小島吉雄氏「新古今和歌集の研究、続篇」一三九、一四〇ページ

1 じ

(以上)